

日本の医療をより良く発展させるため、ティーパック株式会社は医療関連サービスの開発に日夜努力し続けてきた。ハロー健康相談24、こころのサポートシステム、ティーパックEAP、そして日本の医学会を代表する先生方にご協力いただいたドクターオブドクターズネットワーク。彼らは革新的な医療関連サービスを次々と生み出していった。しかしそのあゆみは決して平坦なものではなかった。

ティーパック株式会社がこれまでの20年間を、砂原社長へのインタビューを元にまとめた歴史編。(全12回シリーズ)

## 第3章 誰もが不可能と考えた「名医紹介システム」を完成

### ◆高度医療、専門医療のネットワークを

頭打ちの続く当社の業績に再び強い揚力を与えたのが、名医紹介システム、D of Dの構築である。取り組みは意外に古く、1994（平成6）年には調査・研究を開始している。

D of Dの核となる「名医紹介」のアイデアは、長年砂原が温めてきたものであった。

『僕が20歳の頃、叔父の奥さんが44歳のときに肺ガンで亡くなりました。8月後半、左手が上がらないと入院、9月末にあっという間に息を引き取ったわけです。その時、ガンというのは「死の病」なんだなと実感しました。ところが30歳の頃、今度は義理の母の60歳になる長兄にかなり進行した胃ガンが見つかりました。十中八九ダメだろうと言われていたのですが、東京女子医大の名医の手術を受けて助かり、80代後半まで長生きしました。

結局、死の病と言われるガンでも、名医にかかれば治る確率は非常に高いが、叔父の奥さんのように地域の病院にかかると、死の宣告をされるに等しい病ということなんです。

相談者から名医を紹介して欲しいという要望が大きかったのも事実ですが、もとは私自身のこの2人の経験がきっかけでした。』

砂原の計画を知った周囲は、皆一様に反対した。学閥のある医学界は封建的だから、ドクターがドクターを評価し、推薦するような横のつながりなど構築できるわけがない、というのが大方の理由である。とりわけ医学界の実状をよく知る人ほど猛然と反対した。古参の社員をはじめ砂原の友人で、創業期からの支援者である藤田紘一郎現取締役（東京医科歯科大学名誉教授）でさえ「砂原さんは医学の世界を知らないんだ。そんなに甘くはない」と再三反対したほどである。

ところが砂原は、あきらめない。

『電話相談の時だって何度も否定されてますし、苦にはなりませんでした。というより「できっこない」と言われたほうがむしろ燃えます。

僕は大学3年の時に有限会社を作り、24歳で保険代理店を立ち上げた。保険代理店は多摩でもダントツ1位の売上でした。そして38歳の時にティーパックを作った。その過程で「誰にでもできる事を、誰もできないくらいやる」のは非常に効果的だ、ということを手学したので。

例えば叔父から50万円借りるために、6時間土下座をしたこともある。

また、保険代理店を始めた当初、飛び込みを1日50軒と決めてやったのですが、始めたら最後、交番だろうが病院だろうが薬局だろうが、通り沿いに1軒残らず飛び込む。これがいやでね。早く飛び込みを終わらせたいから、そのうち目標を55軒、翌日は60軒、翌々日は65軒とだんだん上げていったんです。

D of Dもそう。誰でもできる、けど誰もやらない。できっこないと決め付けてしまう。』

## ◆日野原先生、大島先生を突破口に

砂原は、自分の人脈を総動員して各医師を説得して回った。確かに、学閥や診療科目ごとに縦割り傾向の強い日本の医学界にあって、名医紹介ネットのような横断的組織を作るのは極めて難しく、目に見えるほど劇的な進展はなかった。電話相談の時あれほど相談に乗ってくれた厚生省ですら、この件については積極的でなかった。

そんなとき、運命の女神と言うべきか、砂原のアイデアに賛同してくれる医師が現れる。聖路加国際病院理事長、日野原重明先生、東大医学部元教授の大島正光先生であった。

1993（平成5）年に砂原は、とある講演会を通じてモダン・ヘルスケア研究部会の幹事、東京大学の山野井昇先生と知り合う。同研究会はゼネコンや保険会社で構成される研究会で、砂原はここで講演するよう依頼された。その席上、座長を務める日野原先生と面識を持つに至るのである。

『日野原先生はご高齢ですが、考えていらっしゃることは若い医師よりも斬新で、名医紹介サービスの話も「大変だろうがおもしろいじゃないか。ぼくでよければ協力するよ」と言ってくださった。

聖路加国際病院は日本中の医師のあこがれで、聖路加の臨床医に成るべく全国から優れた医師が集まります。従ってレベルが高い。先生も医師の能力が治療を左右することをよくご存じなんですね。

また話をしていく中で、アメリカのようなセカンドオピニオン制度、つまりかかりつけの医師が診断（ファーストオピニオン）し、病気によっては専門医も診断するというしくみもあるよ、というアドバイスもいただきました。これは2005（平成17）年4月に、厚生労働省がセカンドオピニオン制度を導入するより10年も前の話です。

こうして日野原先生から室蘭日鋼記念病院、岡山の倉敷中央病院、大阪の北野病院、済生会熊本病院などをご紹介いただきました。また、大島先生からも東大の人脈を紹介していただきました。紹介された方々は本来なら雲の上の人、簡単に会えません。しかし、日野原先生や大島先生の紹介があればこわいものなしなんです。とはいえ、錚々たるメンバーですからまずは人間の中身で勝負しなければなりませんでした。

こうしてできたネットワークは、当社のメインの財産、といっても過言ではありません。』

砂原は評議員会の企画書を練り上げては何度も日野原先生のもとを訪れ、アドバイスをいただいた。これを携え、日野原先生や大島先生の紹介先へ出向き、丹念に説いて回る。そしてそこからさらに医師を紹介してもらう。これを丹念に繰り返したのである。

こうした説得が功を奏し、賛同する医師は順調に増えた。1994（平成6）年にティーペック内に準備室を開設するとともに、日野原先生を座長とする評議員会を立ち上げたのである。評議員には日野原先生、大島先生を筆頭に、順天堂大学の廣瀬俊一先生、北川龍一先生、癌研有明病院の武藤徹一郎先生、前出の藤田紘一郎先生、聖路加病院の櫻井健司院長、東京女子医大の横山泉先生らが名を連ねて下さった。

どの先生も世界レベルの大変な名医だけに、医学界に身を置く人が名簿を見、絶句することもしばしばだったという。